

観光文化

Tourism & Culture

208

July 2011

特集◎東日本大震災からの 復興に向けたツーリズムの役割 — 復興プランへの提言

◆巻頭言

東北の復興は農漁業と観光から 増田 寛也……①

◆特集

- ・震災復興とツーリズムの役割 西村 幸夫……②
- ・伝えたい故郷の景観
— 阪神・淡路大震災からの復興の経験から 鳴海 邦碩……⑥
- ・北海道南西沖地震の奥尻島復興の経験から 新村 卓実……⑪
- ・中越大震災および中越沖地震からの観光復興
— 震災からの観光復興に向けてどのような対策を取ってきたか 高橋 正……⑯

◆連載

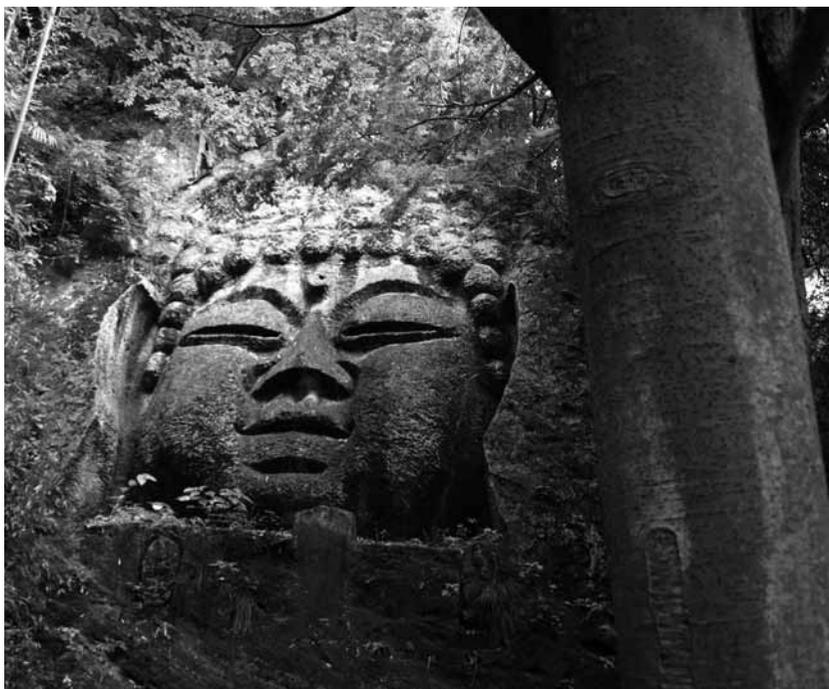
I あの町この町 第44回

ザ・モースト・ビューティフル・ヴィレッジ—長野県大鹿村 池内 紀……⑳

II ホスピタリティーの手触り 65

日本人の誇りとしてのホテル 山口 由美……㉔

◆新着図書紹介……㉔



— 群馬県甘楽町・日本一の摩崖仏 —

朝からうだるような暑さに閉口しながらカメラを担いで山道を上っていくと、突然、ダイナミックな摩崖仏が目前に現れた。日本一をうたい文句の大摩崖仏は群馬県甘楽町小幡にある。かつて小幡城下の町外れに鎌倉時代初期に建立された長厳寺わきの石段を上りつめると、高さ十メートル、幅八メートルに及ぶ巨大な表情の石仏が現れ、圧倒されるような迫力に私はしばし立ちすくむほどであった。いったい誰が何の目的で摩崖仏を彫ったのかと思い、長厳寺住職に尋ねると「仏教彫刻に関心を持っていた吉田文作さん（故人）が六年ほどかけて岩盤に彫った」と語ってくれた。完成したのは一九八六年のことである。吉田文作さんが、足場も決して良くない場所でもこつこつと汗を流した姿を想像すると、凡人には理解し難い思いにかられる。「世界平和を祈りながら彫った」という目的が何とも素晴らしい心意気を感ぜさせてくれる。

世の中には奇特な人がいて、その無心さですがすがしい。

（写真・文 樋口健二）

東日本大震災から四カ月以上が経過したが、いまだに多くの被災者が厳しい避難所生活を強いられている。この人々の生命を守ることは国の最優先の課題である。復興の主役は市町村と住民である。巨大津波により破壊された東北沿岸部を新しい国土としてよみがえらせるには、壮大なエネルギーを要するが、被災直後の東北人の規律ある姿に世界の称賛が集まった。これまで幾多の苦難を乗り越えてきた歴史を有する東北である。今回の復興も国を挙げての大事業となろうが、最後は、東北人の手によって成し遂げられるであろう。

被災地の復興については、東北全体を見渡したプランが必要である。東北六県で、東北の自立を前提に、先導的かつ意欲的なものにならなければならない。その中核となる産業再生については、すでに各方面からさまざまなアイデアが出されている。豊富な森林、海洋資源を活用した自然再生エネルギーの企業化、医療や予防医学などを核とした新たな産業拠点の形成など、広範囲に及ぶ。いずれも魅力的なアイデアで、その実現のための「経済再生特区」構想も提言されている。同時に、地域の優位性を生かし、将来への持続性につながる産業を動かすことが急がれる。

東北の強みは何といても農漁業と観光である。この二つを基本にして、すぐに経済が回り出すようにしたい。沿岸の

東北の復興は農漁業と観光から

増田 寛也

野村総合研究所顧問／元総務大臣／前岩手県知事

漁業は、今や時間との勝負である。海のカレンダーは、この時期最盛期のカツオ、八月下旬のサンマ、秋サケ、養殖ではワカメ、ウニ、ホタテ、カキと次々に漁期の到来を知らせていく。浜の動きは加工業にも及び地域全体に伝わる。

沿岸部に限らず内陸部も含めた東北全体では観光を動かしたい。裾野が広く、農漁業ともつながる重要な産業である。八月の東北各地の夏祭り、秋の紅葉、冬場の雪に温泉と、こちらもシーズンは次々にやってくる。関係者は待ったなしの対応が必要となる。

現在は、日本人の自粛ムード、海外での風評被害により旅行者が著しく減少している。春先からの相次ぐキャンセルにより、悲痛な叫び声が聞こえてくる。まずは日本人が動くことだ。多くの日本人に東北を訪れてほしい。被害を受けず健全な内陸地域の経済活動と被災地の復興を、一つの連続した持続性のある活動とする工夫が求められる。幸いにして、六月下旬に平泉（岩手県）がユネスコの世界文化遺産に登録された。東北の各地には、日本の原風景が展開している。その土地に住む人々との交流が、訪れる旅人の心を癒やしてきた。この原点があれば、必ず海外からの旅行者も戻ってくる。

農漁業と観光が動けば東北経済は立ち直り、日本経済も回り始める。今こそ、東北に足を運ぼう。

（ますだ ひろや）

東日本大震災からの復興に向けたツーリズムの役割

復興プランへの提言

東日本大震災による被災地域への観光客激減が地域経済に大きな打撃を与えました。同時に、地域にとって観光がいかに重要な産業であるかを認識する機会にもなりました。今号は、「東日本大震災からの復興に向けたツーリズムの役割」をテーマに、景観・まちづくりの専門家や各地で発生した震災の復興に尽力された方々から、今後の復興プランへの提言を紹介します。

震災復興とツーリズムの役割

東京大学先端科学技術研究センター教授

西村 幸夫

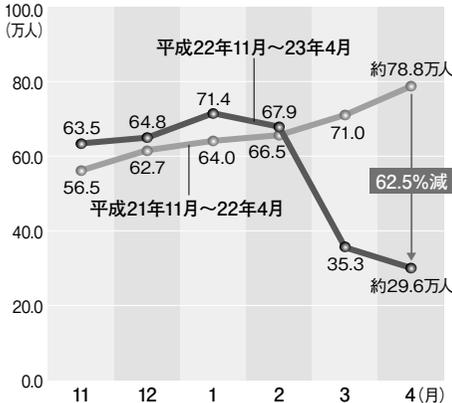
今年度の『観光白書』が論じる 大震災の影響

去る二〇二一年（平成三十三年）六月十四日に閣議決定され、会期延長中の通常国会に提出される予定の二〇二一年度のいわゆる『観光白書』は、二〇二二年三月十一日に起きた東日本大震災を受けて急遽、二〇二〇年度の観光の状況の第一部第2章に「東日本大震災の被害と復興に向けて」という項目を立てて、震災による観光関連の被害の状況とその

後の復興へ向けた足取りを論じている。

例えば、物理的な被害として東北六県の登録旅館・ホテルの四分の一が営業停止となり、多数が限定的な営業となったことが報じられている。さらに深刻なのは、広く報道されているとおり、宿泊予約のキャンセルである。震災以降、三・四月の宿泊予約は東北地方で約六一％、関東地方で約四八％、日本全体でも約三六％がキャンセルの憂き目を見ているのである。なかでも訪日外国人旅行者の数は震災発生の日から二〇二一年三月末までの

訪日外客数の推移



資料：観光庁平成22年度観光白書（概要）

二十日間を見ると、なんと前年同期比七三%もの落ち込みとなっている。

このように今回の大震災は、観光がいかに地域の安全の下に成り立っているのかを改めて浮かび上がらせることとなった。風評被害の大きさも指摘されているが、これも観光産業が地域イメージに依存して成り立っているのかを明らかにしたといえる。良好な地域イメージを確立するのは容易ではないが、そうして苦勞して打ち立ててきた地域イメージも一瞬にして潰え去ることがある、ということも今回の自然災害によって明らかになった。

また一方で、地域を支える産業として観光が重要な位置を占めていることが、今回の報道で明らかになったということもできる。閑古鳥が鳴く観光地や、ツアー客のいない首都圏の風景などに対する人々の関心も高い。

さらに今年度の『観光白書』は、もう一歩突っ込んで、復興に向けて観光が果たし得る役割について言及している。すなわち、観光は他の産業と比べると、復興の立ち上がりが比較的早く、ある程度のインフラの復旧があれば即戦力として経済効果を発揮し得ることを指摘しているほか、そうした立ち上がりの早さが雇用の確保につながることを強調している。

今後、地域イメージの救済に向けて、さまざまな誘客キャンペーンや商品のデイスカウントなどが企画されていくだろうが、これを単に観光収入という経済効果だけから見るとではなく（観光地には赤字覚悟のプロモーションという側面もあるだろう）、訪問客が回復することによる雇用創出の効果を重視すべきであろう。

また、『白書』は中長期的な課題として、復興計画の中にあらかじめ観光の視点を入れておくことの必要性を述べ、さらに観光が生産移転できない地場に固有の産業であることを積極的に評価し、地域の将来計画の中に地域性を表出する核となる産業であるとして、観光の重要性を力説している。

さらに、ダメージを受けた観光がどのように回復していくかといった今後の予測に関して、『白書』は一九九五年に起きた阪神・淡路大震災の例を挙げ、震災前の水準まで神戸の観光客数が回復するまでには観光資源が同じだとすると十二年もかかっていることを示している。

そして、震災後にスタートした「神戸ルミナリエ」を引き合いに出して、このイベントの入込客数を追加で算入することで、四年後の一九九九年に神戸市の入込観光客数は震災

前の水準を超えるまでに戻ったことを論じている。

つまりここでいえるのは、地域イメージを回復するための大規模イベントなどの仕掛けが、少なくとも神戸では成功したということである。災害などによって地域イメージに傷をつけることも一瞬のことであるとすれば、「神戸ルミナリエ」による夜のにぎわいの創出といった目新しい経営戦略を立てることによって、地域イメージをV字型に回復することもあながち不可能ではないということである。こうした局面でも観光は大きな役割を果たすことができるのである。いや、観光こそこうしたV字型の復活の牽引役となることができる。

今回の震災が 改めて気づかせてくれたこと

今回の大震災はさまざまな教訓を私たちにもたらした。その中で、観光の世界にも関連したものを拾い出してみよう。

まずいえることは、自然の脅威に対して謙虚であれということである。そして古くからの文化遺産は、松島といい、平泉といい、自然と寄り添うような位置に立地しており、今回も特段の被害が出ていない。自然の脅威に

自然と寄り添うような位置に
立地する松島の島々
(写真提供・松島観光協会)



世界文化遺産に登録された
平泉 毛越寺本堂
(写真提供・平泉観光協会)



対して敏感であり、文化財の立地には知恵を絞って安全を確保しているのである。長い歴史を生き延びてきた観光地にはそうした知恵が詰まっているといえるのではないだろうか。

第二に、地域が生きていくための基本的な要件に安心・安全があるということが挙げられる。普段はあまりに当たり前すぎて気づかないようなことでも、改めて災害のあとに見直してみると、安心・安全のための知恵がそろそろかになっていないかということに目がいく。観光はこのあたりの感度が高く、変化に敏感に反応することが（時に風評被害のような過剰反応もあるが）、今回の震災で明白に

なった。観光は安心・安全のリトマス試験紙になり得る。なぜなら、部外者にこそいちばん不安な箇所が目につくものだからである。

第三に、逆説的ではあるが、今回の震災直後の被災者の落ち着いた行動によって、日本には文化的で、かつ安定した社会が現存するということが雄弁に報道されたことである。

この国には、自分の身の安全よりも顧客の身の安全を第一に考える従業員が少なからずいるということ、自分が避難する前に商品が散乱しないように身を挺して押さえるといった行動をとった売り子が（それも時にはアルバイトの売り子が）いるのである。それが口コミや防犯カメラの映像として何度も報道された。これによって、皮肉にも日本の潜在的な安全性・安心感が広く認識されることとなった。日本の社会に対する好感度がアップしたことは確かだろう（政治に対する好感度はまた別だろう）。これは長い目で見ると、今後の観光施策にとって相当のプラス要因として働くだらう。

第四に、すでに述べられたことであるが、日本経済における観光セクターの大きさが、非常時の急激な落ち込みという陰面としてではあるが、認識されたということは大きい。これまで質実剛健のものづくり大国、あるいは

はクールジャパンのソフト大国といったふう
に描かれることの多かった日本という国が、
観光という手づくりの地場産業の面で高い可
能性を秘めているということが見えてきた。

現時点での ツーリズムの役割を考える

では、今回の大震災が私たちに気づかせてくれたことは、観光の今後の役割を考えていくうえで、どのような意味を持つといえるのだろうか。

まず第一に、これまでもいわれてきたことではあるが、観光の産業としての規模の大きさ、少なくとも影響力が、失われた観光客数を通して、厳然と私たちの前に具体的な数値として表れたことを通して、一般の人々にさらに明白に意識されるに至ったことが挙げられる。

同時に、風評被害に代表されるように観光産業が地域イメージに左右されやすいこと、したがって地域イメージの注意深い管理と保持、さらには地域イメージが傷ついた場合にはその速やかな復旧が戦略的に重要であることが挙げられる。神戸のルミナリエに見られるように、復興のための大規模イベントが傷ついた地域イメージを一掃することに効果が高いこと、さらには入込観光客数の復旧

にも有効であることが示された。

また、観光は労働集約型の地場産業であるので、雇創出効果が高く、復興の早い段階での経済的な手掛かりとして有効であるということもできる。大規模イベントとそこでの雇創出は観光が復興に当たって果たせる役割の有力な部分である。

一方で、大震災直後の被災した人々の落ち着いた立ち居振る舞いは、日本が奥深い慎みをたたえた国であるということを図らずも広く世界に発信する機会ともなった。来訪者の立場からすると、日本は応援したくなるような心根の優しさを持った国と映ったに違いない。原発のほとぼりが冷めたら、癒やしの国、

つつしみ深い文化の国、そして長寿の国としての日本を積極的に発信することによって、

これまでのマイナスを埋め合わせることができるとも思えない。少なくとも世界は日本の庶民の味方になってくれるだろう。

加えて今年度の『観光白書』は岩手・宮城・福島という東北三県の観光消費額が、それぞれ各県の代表的な産業の規模と比較して、まったく遜色がないことを図示している。例えば、岩手県観光消費額は年間の農業所得に匹敵し、海面漁業（海面養殖業を除く）の年間産出額を数倍も上回っている。宮城県では、年間の観光消費額は、県内最大の出荷額を誇る食料品製造業と同第二位の電子部

品製造業の年間出荷額の中間の位置につけているのである。

観光産業が東北地方の重要な基幹産業の一つであることを数字で裏付けているのだ。

続く章で、『観光白書』は被災地に限らず、一般地域において、観光に関わる産業がどのように集積し、連携し合っているのかを詳細な試験調査をもとに明らかにしている（第1部第3章）。

観光を産業として客観的に論じるに足るデータがようやくそろいつつあるという現状を見ても、今後、観光をさらに冷静に分析する視角を私たちは手に入れる段階に立ち至ったということができる。

確かに今回の東日本大震災は二度と見たくない悲劇ではあったが、ツーリズムはこれをバネに、新しい客観データに裏打ちされて、物見遊山のイメージからはつきりと決別し、地域の主要な地場産業として確実に評価されるようになっていくだろう。そして復興に当たっては、早期に人々に希望を与えるイメージリーダーとしての役割を演じることが期待されるとともに、復興のフロントランナー産業の一つとして、地域に貢献していくとだろう。

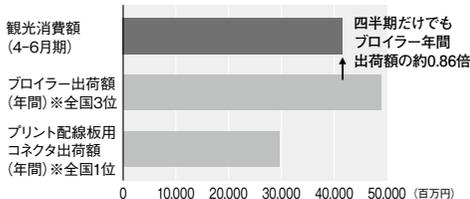
（にしむら ゆきお）

東北3県における観光消費額と主要な産業との比較

【岩手県】

岩手県における観光消費額は、第一四半期分（4-6月期）だけでも、岩手県の主要な工業の年間出荷額を上回っており、プロイラーの年間出荷額の約8割6分となっている。

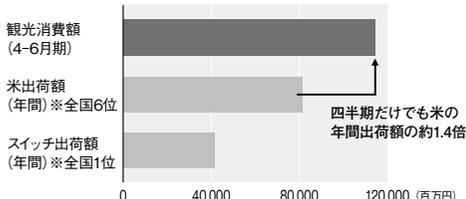
観光消費額と岩手県の主要な産業との規模観比較



【宮城県】

宮城県における観光消費額は、第一四半期分（4-6月期）だけでも、宮城県の主要な産業の年間出荷額を上回っている。

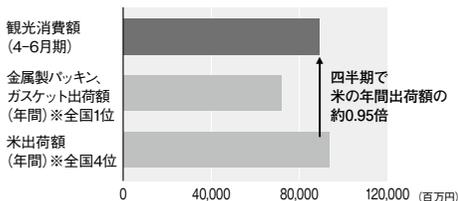
観光消費額と宮城県の主要な産業との規模観比較



【福島県】

福島県における観光消費額は、第一四半期分（4-6月期）だけでも福島県の主要な工業の年間出荷額を上回っており、米の年間出荷額の約9割5分となっている。

観光消費額と福島県の主要な産業との規模観比較



資料：観光庁平成22年度観光白書（簡易版）

伝えたい故郷の景観

阪神・淡路大震災からの復興の経験から

大阪大学名誉教授
 (社)日本都市計画学会 二代会長

鳴海 邦碩

津波被災地の異次元感

津波に襲われた被災地を歩くと、津波の破壊力の凄まじさに驚くばかりである。家は流され、それに加えて船も自動車も流される。大きなタンクでさえ流される。浮くものは根こそぎ流され、そして衝撃で破壊される。破壊された建物からはまたおびただしい家具や什器、あらゆるものが流れ出る。それらが堆積する様子は、まるで巨大な力で攪拌されたようだ。地面にしっかりと根を張っていた樹木も根こそぎとなり、コンクリートで造られた小さなビルでさえ水の力で押し倒される。防潮堤を形成していた数メートル立方のコンクリート塊も移動しひっくり返る。

寄せる津波は壊れた建物や船や自動車を巻き込み、進むにつれて徐々にその破壊力を増大させる。寄せる津波に打ち勝つても、よ

り重たくなることが破壊力を増した引く津波に押し倒される。被災地を歩くと、そうした津波の破壊力が作用した痕跡が随所に広がっている。

津波による被災地はまるで場所性も時間性も失ってしまったように感じられる。定かなものが失われているのである。そうした感覚を被災した方々も感じているのではないだろうかと思う。

一九九五年（平成七年）の阪神・淡路大震災の時、被害の実態調査のために被災地を歩き回った。その時の感覚と今回の津波被災地を歩いて感じる感覚が全く異なるのである。

阪神・淡路の時は、被害が甚大ではあっても、破壊されたものはその場を動かない。今回の被災では建物は破壊され流されてしまっている。つまり三次元が四次元にも五次元にもなっている感覚である。そのため、浮遊感とい

うか、足が地についでいないように感じる。破壊の現場は凄まじいが少し目を転じると、海も山も少しも変わっていないように存在している。それが美しいため、よりやりきれなさがつのる。

残したいね日本の風景

以前山形に行った際に偶然地元の本屋で藤岡和賀夫氏の『残したいね日本の風景』という本を手に入れた。それは「絶滅のおそれのある懐かしい日本の風景」をテーマにしたもので、東北六県のそうした風景を取材し紹介したものであった。今回の震災のあとで改めて本を開いてみると、今回の大地震で大きな被害を受けた場所が二カ所掲載されている。二つとも宮城県である。

一つは南三陸町志津川で、紹介ページのトップには「平凡な幸せ 絵に描いた町」とあ

った。続くページには、波伝谷漁港、荒砥漁港、藤浜漁港の写真が掲載されていた。中心地区である志津川もそうだが、これらの漁港は津波によって大きな被害を受けた。

もう一つは石巻市雄勝町で、トップには「スレート 懐かしいモダンの匂い」とある。この地域では黒色硬質粘板岩、硯の元材になる石を産出し、これが屋根を葺くスレートにも使われる。鄙には珍しいスレート葺きの建物が趣のある風景となることが紹介されている。この地域も津波に襲われ、雄勝硯伝統産業会館や雄勝石ギャラリーも大きな被害を受けた。

藤岡氏が近代化の進行や家屋等の老朽化で「絶滅のおそれがある」と判断した「残したい風景」が津波によって失われたのである。このような風景を私たちは再び目にする事ができるのだろうか。

復興につれて高まった景観への関心

阪神・淡路大震災からの復興を振り返ってみても今も思うことは、町の変化のスピードが非常に速いことであった。普通ならば二十年三十年かかる変化が二、三年で大きく進んでいくのである。まるで早回しの映画を見るようであった。そうした過程で「プレファブ住宅が

増加し、うるおのない景観が生まれている」とか「画一的な景観になっている」といった印象がしばしば新聞などに紹介されるようになった。記者の感想もあれば有識者の感想もあった。景観に関連する情報として「木造家屋が倒壊したのは瓦が重かったためだ」という新聞記事が与えた影響は大きかった。このいわば誤報的な記事のせいで、神戸・阪神間の再建住宅から実際に瓦がなくなったのである。

被災地域の住民の方々から意見を聞いてみても、復興が進み落ち着くにつれて、地域の景観が必ずしも良くなっていないということを感じている人が増えていった。とりわけお年寄りの方々が町並みの急激な変化に戸惑いを感じている。このような状況にいかに対処すべきかという問題意識に立って、一九九八年（平成十年）十月（震災後四年目）、兵庫県は『被災地の景観の復興をめざして』兵庫県景観復興マスタープログラムの概要を発表した。筆者は、この策定調査に加わり、被災地の復興の実態を調査するとともに、さまざまな組織の方々からヒアリング調査を行った。

伝えたい故郷の景観

同じ一九九八年、兵庫県は「震災をのりこえ、県民が選んだ：伝えたいふるさとの景観」

の募集を行った。これは、震災を乗り越えて住民に親しまれている景観を、将来に伝えたいと思う「ふるさとの景観」として推薦してもらったものである。募集に当たっては、「震災を経て残った、震災で失われた、震災復興で新たに出来た」景観が、推薦されてくることが想定された。推薦総数は千八百七十一件あり、重複等を省くと、千三百七十四件の景観が推薦されてきた。筆者はこの取りまとめ作業に委員長として参加し、推薦のあった風景写真の全てを見る機会を持った。

推薦された景観のなかには、例えば次のような、普段あまり「景観」として意識されないようなものも多数あった。

- ① 大きな都会もふるさとであり、人々が親しみを感じ、ホッとするような景観がさまざまに存在している。
- ② 自分しか知らない、小さな場所、あるいは普段見慣れた田園地域の景観かもしれないが、将来に伝えたい。
- ③ 駄菓子屋さんの店先の光景のような、あと十年もすればなくなってしまうかもしれない景観が愛情を込めて見られている。

推薦された景観が教えてくれるもの

取りまとめに当たった委員たちは推薦され

てきた「景観」に触発されて、それぞれが以下のようなテーマで「景観」を読み解く文章を書いた。

- ・「時間の継続を語る樹木、地形を語る水路」
- ・「人と自然の営み」
- ・「景観の都市性」
- ・「くらしの知恵やコミュニティを表現する住まいの景観」
- ・「幸せの故郷はありますか」
- ・「震災で失われたもの、継がれたもの、生まれたもの」
- ・「やすらぎをもたらす身近な自然と下町の界隈」

推薦された千三百余の景観のなかから、地域別、テーマ別の二つの視点で選ばれた四百五の景観が、『震災をのりこえ、県民が選んだ…伝えたいふるさとの景観』として、冊子に取りまとめられている。

「大地に根をはってそびえるくすの木。震災の時はここへ大勢の人々が集まり毛布をかぶり、湊川、長田と次々と燃え上がる街を息をのみふるえながら見ました。幾人の子供達がこの木に登り豊かな思いに浸った事か。近頃は木に登って遊ぶ子供も少なくなっていました。孫の木登りを見て、うれしさでシッターを切りました。景観には遠いかもし

れませんが、人間に大きな力を与え、これからも生き物たちを育ててくれるであろうこの古木が好きです」

震災から二年たった年の四月、木登りをする子供たちの写真を撮ったAさんは、このような一文を添えて、応募してくれた(写真1)。普通、樹木などの緑は、人にうるおいを与えてくれる。しかし、震災の直後、被災地では、そのいつもと変わらない姿に自然の無情さを感じた人も少なくない。被災地の現場は大変な状況なのに、空や海、そして緑など、自然はいつもと変わらない超越した姿で目に映り、そこに無情さを感じてしまう。しかし、やがて、花や緑のうるおいをもたらす力に気づき始め、阪神・淡路の被災地ではさまざまな花や緑の運動が始まった。

取りまとめに加わった民俗学の森栗茂一氏は、「幸せの故郷はありますか」というテーマで一文を寄せた。これはかつて柳田國男が村の調査の際にいつも最後に聞いた問いであったという。以下は森栗氏の文章の一部である。

〔略〕 神戸・阪神ではモダンな町の誇りであった旧家や神社、街道風景が変貌してしまった。長屋の下町は、軒並み焼けてしまった。私たちは、この悲しみの涙の一つ一つを拾い集めて、新たな人と人、人と自然がつながる

故郷をつくりたい。(中略) 幸福を求めながらも故郷を見つげなかつた近代人は、震災を経て初めて、我々の故郷を模索しつつある。それは、長田大火で焼けた木の根が生命の木として再生するかのごとくである(写真2)。

人の生命力、伝えたいという思いは、かくも強い物なのである」



写真1 応募写真：公園の大木(神戸市兵庫区氷室町)



写真2 応募写真：仮設住宅が点在するなか、焼けた木が芽吹く
(神戸市長田区御蔵通)

「伝えたいふるさとの景観」リストは、阪神・淡路大震災で被災した歴史的、文化的に重要な町並みや町のシンボリック建築物の復興を図る「景観ルネサンス・まちなみ保全事業」の対象選定において参照された。また、被災地の経済復興のひとつとして観光復興への取り組みが行われ、その一環として一九九九年（平成十一年）に「阪神・淡路百名所」が選定された。この選定に当たっても先の「伝えたいふるさとの景観」が参考にされている。

人が来続けることの大事さ

阪神・淡路大震災からの復興の過程で、

人がやってきてくれることの大事さを痛感した人は少なくない。時間がたつにつれて被災地域外の人々の復興への関心が薄れていく。被災地は取り残されているのではないかと感じるものが被災地の人々の意気沮喪（そぼう）につながる。復興に関心を持ち続けている人がいることが復興の当事者に元気を与えてくれる。復興の難しさを人に話すことによって少しだけでも気持ちに楽になる。被災地が忘れられていないことが確認でき改めて取り組む意欲がわいてくる。

「不謹慎かもしれない」と悩みながらも「震災ツーリズム」に取り組んだ阪神・淡路の被災地がある。神戸の新長田駅南部地区である。この地区は、阪神・淡路大震災で起きた火災で大きな被害を受け、再開発事業による復興が行われた。地区の商業活動等の活性化を目指した活動が二〇〇〇年（平成十二年）から行われ、その一環として、修学旅行の誘致に取り組んだ。「震災のまち」としての知名度は全国区レベルであり、それを生かそうと考えたのである。広島原爆ドームを一種の先進事例と位置づけた。

修学旅行生の受け入れでは、生徒一人あたり数千円を徴収し、生徒自身の家の合鍵を作ったり、美容師をしたりといった事業者の

体験をしてもらう。商店主インタビューでは、実際に生徒に商店街を回ってもらい、店頭「歓迎〇〇校様」と掲示している店の商店主に突撃インタビューをする。時を経るにつれて商店主は震災の話をする機会がなくなっており、これを機会に快く話をしてくれ生徒たちは大きな感動を得ているという。ついでにその店で土産も買ってくれる。修学旅行生の問いかけから、お好み焼き屋マップづくりや名物づくりへの取り組みも行われた。

復興ツーリズムに取り組む

神戸の新長田では自らの活動を「災害ツーリズム」と名づけた。呼び名は「復興ツーリズム」でもいいし「災害復興ツーリズム」でもいい。被災地に行く人が途絶えないようにしたい。人がやってくるのが被災地の元気のもとになる。人が訪れることによって次第に経済活動も活発化していく。

初めは「ボランティアツーリズム」で、やがてそれが「災害を聞くツーリズム」になるかもしれない。阪神・淡路でも中越でも「災害の語り部」が生まれ、災害の経験が語り継がれている。一番期待したいことは、冒頭に述べたことも関連するが、「自然の力の大きさ」と人の能力の「限界」を体感してもらうこ



写真3 大きなコンクリート塊も破壊され移動する（南三陸町、2011.4.30撮影）

とである。それは現場に行ってみないとわからない（写真3）。

先般東北の被災地に視察に行った折、小さな漁港で高齢のご夫婦に出会った（写真4）。元消防団長のおじいさんは静かな口調で次のように話してくれた。

「ここでは一人が亡くなり、二人が泳いで戻ってきた。多くの家は被害を受けたが他の人は皆助かった。防潮堤の水門は破れない保証はないと言いつつ続けた。このような災害があり得ることを全国の人たちに伝えてほしい」。被災地が復興する姿にもまた学ぶことが多い。被災地の復興から元気をもらう「復興ツーリズム」も重要だと思う。特に若い人にはそうしたエネルギーを体験してほしい。阪

神・淡路大震災の時は、都市計画学会と建築学会が呼びかけた被害実態調査に全国から学生や教員が千百人も駆けつけた。彼らはその体験のなから多くのことを学んだ。

今回の東日本大震災の大津波によって大きな被害を受けた被災地は豊かな自然によって包み込まれている。そうした周囲の環境と呼应しながら復興が着実に進んでいくことに期待したい。そして再び「残したい風景」が形成されることを祈る。

（なるみ く に ひろ）



写真4 破壊された小さな漁港でたき火をするおばあさん（気仙沼市本吉町蔵内、2011.5.1撮影）

北海道南西沖地震の奥尻島復興の経験から

奥尻町長 新村 卓実

私たちの住む奥尻島は、北海道の南西端に位置し、江差町の西北六十一キロ、せたな町の南西四十二キロの日本海に浮かぶ島です。

南北に長い台形状の島で、島の周囲は八十四キロに及び、島の面積は二四・九八平方キロメートルで、北海道の離島では利尻島に次ぐ二番目に大きな島です。

奥尻の由来

島名は古いアイヌ語の「イクシユンシリ」。その後「イクシリ」と訛まがったもので、「イク」は「向こう」、「シリ」は「島」という「向こうの島」を意味することが由来となっています。島の歴史は古く、約八千年前の縄文時代早期に人が移り住み、多くの貴重な遺跡や遺物が出土していて、その出土品の一つである勾玉まがたまは国宝級たごだと



ブナ林の緑と青い海に囲まれた自然豊かな宝の島



丁子頭勾玉は北日本（北海道・東北）では奥尻島のみ発見されている。

もいわれており、高貴な位の人が住んでいたのではないかと、見る人々のいにしへの時代への妄想を駆り立てます。

奥尻のあゆみ

一七六七年（明和四年）に、田口九兵衛が漁業を営むために移住して以来、永住する人が増えたといわれ、一八六九年（明治二年）奥尻島全体が「奥尻郡」となり、一八七九年（明治十二年）に戸長役場が置かれ、一九〇六年（明治三十九年）に「奥尻村」、一九六六年（昭和四十一年）に現在の「奥尻町」となりました。

島の基幹産業は、古くから盛んな水産業で「夢の島」「宝の島」と呼ばれ、明治末期まではニシン漁が主体でしたが、近年はイカやホッケの近海漁業や、ウニ・アワビを中心とした「磯根漁業」が主となり、その豊富な海の幸を求めて観光客が増え、水産業と観



高さ18メートルの奇岩「鍋釣岩」

光産業に力を注いでいます。

北の地の風雪と、北の海の荒波に何千年もの間、耐えながらその形を変えてきた奇岩「鍋釣岩」が島のシンボルとして奥尻島を訪れる人々を迎えています。

奥尻島に上陸し、島の内部に入ると、島の総面積の七〇%を占める森林があり、いろいろな種類の山菜も豊富で、その森林の中には、人に害を及ぼす動物の存在もなく、海・山ともに訪れる人々を楽しませてくれています。かつては東洋一といわれた硫黄鉱山があり、硫黄が採鉱されていたこともあり、温泉がわき、自然美が豊かな観光地となっています。

北海道南西沖地震の発生

島と北海道本道をつなぐ奥尻港湾、奥尻空港の整備、江差とせたな間の定期フェリー

の就航、函館と奥尻間の航空路線と、交通アクセスを中心に島の生活環境の整備も進んでいた矢先の一九九三年（平成五年）七月十二日午後十時十七分、北海道南西沖を震源とするマグニチュード7.8の地震による烈震と大津波の直撃を受け、さらには火災の発生と、島は壊滅的な被害を受けました。

島には当時四千四百九十三人が住んでいて、島内の死者、行方不明者百九十八人。町が一瞬で消える怖さ。日本で地震が起きるたびに思い出します。

うねる海に漂う家の二階部分から助けを呼ぶ女性の声が聞こえ、あちこちで火災が起き、暗闇に燃える炎。

わが町はどこに行ってしまったか

一夜明けた青苗の町は、東日本大震災で壊滅した東北地方の町と同じ惨状で、今まで長い年月をかけて、さまざまな変化を乗り越え創造してきた町並みが一瞬で奪われてしまいました。もう島の再生は無理だと思いました。恐怖の夜から、二日、三日と時間が経過し、ご遺体の安置、行方不明者の捜索が開始され、一週間後からは、がれきの処理も比較的スムーズに進んでいきました。

津波の襲来から時間が過ぎ、少しずつ冷静

な気持ちを取り戻した人たちが、かつてわが家があった場所にたえずむ姿が見え始めました。私もそのなかの一人です。

幸いにも私の家族は全員無事でしたが、無情にもお子さんを亡くされた方、長年連れ添った夫や妻を奪われた方、また、同居していたご高齢のご両親を亡くされた方とさまざまでした。

復旧、復興に向けて動き出す

各地域の会館、学校の体育館が被災者のための避難所となり、そこに避難した人たちの話題は「これからの奥尻はどうなるのだろうか」、そのことに尽きました。

そのようななかで、いち早く国の関係機関の方、北海道庁の職員の方々が奥尻町に入り、復旧から復興に向けた町の再生に関するグラントデザイン作成に取り組んでくれました。そして何よりも、全国の皆さまから奥尻島を応援しようという、物心両面のご支援をいただき、百九十億円という義援金が寄せられました。その当時、私は奥尻町議会の副議長をしていました。町長をはじめ、行政に携わる人たちが最も心配していたのは、町の再生と同じく、災害による人口の流出ということでした。人が住んで初めて地域が形成されるという

ことからすれば、何とか人口の流出を防げる町づくり、そして被災者の皆さんに対する生活再建に向けた支援が必要になります。

義援金活用による島の再生

そこで百九十億円の義援金を活用させていただいて、島の再生を図ってこうと行動を起こしました。

町の再生に向けた義援金の配分委員会ができ、そのなかで、漁業・観光サービスマン・農業・商業・サラリーマンなど被災者の生活形態に即した支援策を作り、結果、七十項目余りの支援メニューができ、何とか再生できるといふ思いになりました。

将来の具体的な展望を描くことができれば希望がわきますし、人は待つことができます。

復興後の産業振興のビジョンの大切さ

復興に向け、被災者が中心となった「将来の町づくりを考える会」も立ち上がり、行政側との協議が幾度となく繰り返されました。

その内容は、とにかく住宅を建てる土地を早く整備すること。漁業においては、失った漁船・漁具の整備、観光業においても早く旅館、民宿を再建して収入を得たいということに終始し、復興後の産業振興についてはほと

んど議論がされませんでした。

被災し、長い間避難所での生活そして仮設住宅での生活を強いられてきた人たちにあって、目先のことに話題が終始するということは、当然のことだったと思います。

行政側も、その対応に追われ、奥尻島の将来展望をしっかりと作り上げることができなかったのが実態で、今、改めて当時を振り返ってみると、このことは大きな反省点だと思っています。

人命を守ることに、生活すること、

一致点をどこに置くか

町並みの整備においても、将来も確実に人命を守ることができる安全で安心な町にするため、津波被害に遭った地域は全戸高台移転というプランも提案されましたが、漁師の人たちはそのプランにはなかなか賛成してくれませんでした。

出漁するために必要な潮の様子や天候、風向きなど、朝、自宅の窓から眺め、その日の出漁を決めるという生活を何十年もの間続けてきたので、海のそばに住みたいというのです。

青苗地区には標高十五〜二十メートルの高台があります。最終的には全戸高台移転は実現しませんでした。海に近く標高の低い

場所は三〜六メートルの土盛りをして、宅地整備をしました。

そこは漁港に囲まれた土地で、擁壁を作り、宅地を整備した土地には住宅や店舗を、また擁壁の外側は漁業倉庫や作業場、鉄工所等の非住家の建物と、職住の分離をしております。

同じ青苗地区でも最も南寄りの岬地域は、北海道南西沖地震の十年前に起きた日本海中部地震で発生した津波で二人の命が失われた地域でしたので、その場所を非居住地にし、約六十戸の集落すべてを高台に移転しました。跡地には公園を造り、慰霊碑や津波の記録を伝える奥尻島津波館を建設しました。

地域コミュニティの大切な文化―信頼

復興の過程と復興後においては地域コミュニティの維持も重要だと思えます。奥尻は隣近所が肩を寄せ合いさまざまな絆で結ばれていました。しかし、町の再生の過程で、そのコミュニティが壊れた面もありました。

以前は夜も家の鍵をかけずに寝るといふ、都会の人には理解できないことかもしれないが、それだけ地域全体が信頼で結ばれた土地柄でした。私は奥尻町が誇れる文化の一つであると思っています。

東北地方の被災地でも、避難所ではもちろ



高台に向かう避難路



高さ11メートルの防潮堤。復興後の青苗地区は災害に強い町に変わった

んのこと、町の再生を進める際にも、隣人同士にできるだけ近い土地に住んでもらうという配慮をし、コミュニティを守ってほしいと思います。

奥尻町は震災から五年後の一九九八年（平成十年）に完全復興宣言をしました。復興費は義援金と公共事業費で一千億円を超え、町民は復旧のための公共事業により仕事も収入も得ましたが、それは一時的なものであり、公共事業が落ち着くとあつという間に元の状態に戻りました。

町の復興プランを考えるに当たって

東日本大震災から一週間後、被災地である岩手県大船渡市の職員の方が奥尻島に来て、町づくりに関する視察を行いました。市長は住宅の高台移転を想定しているそうです。被害規模は甚大で、土地の事情も奥尻とは違いますが、市長の考え方は防災の観点からしても理解できます。

現在、私の自宅は高台にあり、前段で述べた、職住を分離できたことについてはよかったですと思っていますが、半面、沿岸部の会社、工場、事業所等へのアクセスを確保できれば住宅や商店は全戸高台移転のほうがよかったですと思っています。



教育旅行受け入れとして津波防災ロールプレーにも取り組んでいる

奥尻島には総延長十四キロ、高さ海拔十一メートルの防潮堤が築られました。沿岸の居住区を中心に、実際の津波の到来の高さに合わせたものです。

いつかまた大地震は必ず起こるだろうし、その時には、大津波も必ず来るかもしれませんが、これで人の命と町を守れるとは思いません。しかし、尊い命を守るための「整備」「再生」なのです。

その場所からは、以前のように美しい海を見ることはできません。悔いとも反省ともつかない思いで防潮堤を眺めると、そのコンク



慰靈碑「時空翔のくぼみ」に7月12日は夕日が沈む



うにまると観光客。島人のもてなしに癒やされ元気になってほしい

リートの塊は、「過去の教えを決して忘れるな」と語りかけてきます。

私たちは、過去の教えを未来の知恵としなければならぬし、あの震災から得た貴重な体験と教訓を後世に伝え、沿岸部に暮らす人々の津波防災に対する意識の高揚につながる行動をしていかなければならないと思います。

東北の復興プランに

産業振興の長期的な施策を

今、被災地の自治体は、住民を早く元の生活に戻してあげたいと試行錯誤しながら復興に向けたさまざまな施策を考えていると思います。そのなかで、二十〜三十年先を見据えた産業振興に関する長期的な施策もぜひ、進めてほしいと思います。

奥尻特有のリズム『おくしりじかん』

あの震災から十八年が経過した奥尻島。豊かな自然や新鮮な水産物はもちろん、この島で暮らす人々の気持ちや営みによる島特有の歴史・文化・風土などの島の自慢となる魅力は今も失われていません。

そして奥尻町には、この町にしかない『おくしりじかん』が流れています。

のんびりゆったり流れる『おくしりじかん』

は、島独自の気候風土が生み出したもので、暮らしを営む人々に奥尻町特有の「リズム」が宿っています。

時に離島では、自然のすさまじい力でのやぶなしに『おくしりじかん』を過ごさなければならぬこともあります。荒天により、北海道本道と島を結ぶフェリー、航空機の交通アクセスが寸断されるのです。

でも、そのような時も決して慌てず、『おくしりじかん』に身を任せ、これからの一日を考えます。島の人々は自然との付き合い方、何でもない日々の楽しみ方を知っているようです。

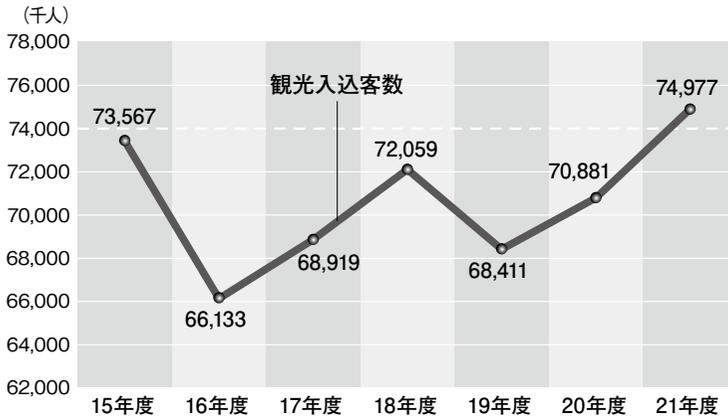
また、島の人々は、どこか表情が穏やかです。それは顔が見える関係をずっと培ってきた町民同士の信頼や支え合いの精神が作用しているからだと思います。

一人ぼっちで遊ぶ近所の子供を気にかける気持ち、井戸端会議に最近顔を見せない人を心配する気持ち、遠く離れた故郷を思う気持ち、町に初めてやってきた人への優しさ、そしていつもの挨拶が、絆やつながり、安心感を育んでいます。

「ホッとしたい時」には、奥尻島を訪れてみてはいかがでしょうか。

(しんむら たかみ)

図1 新潟県観光入込客数の推移



うまさぎっしり新潟



新潟県 destination キャンペーン
キャッチフレーズ&シンボルマーク

らに新潟県 destination キャンペーン
ーションキャンペーン
(J.Rグループによる
全国からの集中送客
キャンペーン)の開催
など、年間を通じて
当県への注目が集ま

観光入込客数の回復

新潟県が毎年公表している「新潟県観光
動態の概要」によると、二〇〇九年度(平成
二十一年度)に当県の観光地を訪れた観光入込
客数(図1)は七千四百九十七万七千五百五十人
で、対前年度比五・八%増、四百九万六千人増
となった。

これは、大河ドラマ『天地人』の舞台となっ
たことをはじめ、「大地の芸術祭」や「トキめ
き新潟国体・トキめき新潟大会」の開催、さ

中越大地震および中越沖地震からの観光復興 震災からの観光復興に向けてどのような対策を取ってきたか

社団法人新潟県観光協会 会長

高橋 正

ったことが主要因と考えられるが、数値上
では、二〇〇四年(平成十六年)の中越大地震
二〇〇七年(平成十九年)の中越沖地震による
観光客減から回復し、中越大地震前の水準に
回復したことになる。

この回復の陰には、県内関係者の努力があ
ったことはもちろんであるが、全国各地からの
広範な支援によるところも誠に大きく、この
場を借りて改めて感謝申し上げたい。

中越大地震の発生

二〇〇四年(平成十六年)十月二十三日午後
五時五十六分、新潟県中越地方の深さ十三キ
ロメートルを震源とする大きな地震が発生。
この地震により、川口町で最大震度7、マグニ
チュード6.8を観測したほか、広い範囲で地
震を観測。余震が長期にわたり続き、避難者
約十万人、住宅損壊約十二万棟など甚大な直

接被害をもたらすとともに、風評被害や上越新幹線の不通により、観光産業をはじめ、県内全域に大きな経済的影響をもたらした。

観光産業の被害状況としては、新潟県旅館組合の集計では次のとおりである。

(直接被害)

長岡、おぢや十日町を中心**に**百軒弱が被害甚大。

(風評被害)

二〇〇四年(平成十六年)十二月十五日時点で四十二万七千人の宿泊キャンセル発生。新しい予約が発生しない。自粛ムードによる忘新年会の中**止**が相次ぐ。

この震災により、震源地近くの観光施設は大きな被害を受けたほか、高速道路の通行止めや上越新幹線の運休などもあったが、それ以外の地域では軽微な被害にとどまっているところも多く、観光地としての営業は十分可能な状況であったにもかかわらず、風評や自粛等により入込客数が大幅に落ち込み、早急な対策が必要な状況であった。

官民一体となった対策

震災直後は観光業界も主に被災地への食料支援や避難者支援などに取り組んでいたが、前述した状況のなか、県内観光関係者による復興



「がんばってます!!
いいがた」ロゴマーク

への取り組みが始まる。当協会の取り組みとしては、まずは正確な情報の発信が必要との認識から、二〇〇四年(平成十六年)十月二十五日からホームページ上で震災関連観光情報を毎日更新したほか、二〇〇四年(平成十六年)十一月一日から旅行社やマスコミ等へのメールマガジンを毎日発行、地域トピックスや交通情報、観光施設の状況、イベント情報などを発信し続けた。

また、新潟県や新潟県旅館組合とともに「がんばってます!! いいがた」緊急キャンペーンを展開。二〇〇四年(平成十六年)十一月十六日から首都圏キャラバン(イベントや旅行者・マスコミ訪問等)を皮切りに、風評被害対策に乗り出した。

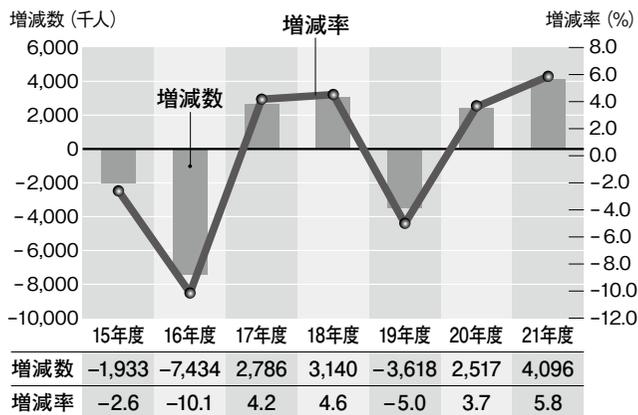
そのようななか、観光産業の復興に向けての連携、結束の場とし、関係団体への要望、提言活動、行政を含めた構成団体や機関との連絡調整を行い当県観光振興の一翼を担うものとして、二〇〇四年(平成十六年)十二月一日に「新潟県観光復興会議」が発足。県内の観光関連団体(宿泊、運輸、レジャー、土産物、旅行業等)が一堂に会する場が設けられるなど、まさしく官民一体となった体制が作られていった

(第3回新潟県観光復興会議の後、震災復興と震災を契機としたさらなる観光振興に向けた取り組み発展のため、二〇〇五年(平成十七年)七月に「新潟県観光復興戦略会議」に改組。二〇一二年(平成二十三年)四月に第9回新潟県観光復興戦略会議を開催したところである)。

また、旅行業界等からの支援の取り組みも活発に行われ、全国旅行業協会および日本旅行業協会からの新潟応援隊派遣や、各種会議の新潟開催、格安応援ツアー等の企画・販売等、各方面から多大な支援をいただいたことは、県内の関係者を鼓舞するものであった。

その後も、震災からの早期復興のために設立された「新潟県中越大地震復興基金」の補助事業を活用して、県内各地で地域自らが観光復興を目指して地域イベントを実施した。例えば、一日も早い復興を祈願し、さらには世界中から復興のためにご支援いただいた多くの方々への感謝のシンボルとして打ち上げられた「新潟県中越大地震復興祈願花火フェニックス」。震災から一年を待たずに「長岡まつり大花火大会」に舞い上がったフェニックスは、地域に勇氣と誇りを与え、全国にその感動を波及させた。その他にも、新発田市月岡温泉で県内全蔵元の地酒が味わえる「新潟の銘酒まつり 月岡温泉『越後の酒天湯子』」

図2 観光客増減の推移



南魚沼市の「被災を乗り越え復活『魚沼菊花展・浦佐菊まつり』事業」、十日町市の「第57回十日町雪まつり『白い愛の祭典』」など、二〇〇五年度(平成十七年度)の基金の観光対策事業として地域イベント二十件、全県対象キャンペーン七件が採択され、県内各地で観光復興への機運を高めた(基金による観光対策事業への補助はその後も続き、二〇二〇年度(平成二十二年)には全県八件、地域四十八件が採択されている)。

当協会でも基金の補助を活用した「にいがた観光復興キャンペーン事業」として、業界や地域、エージェントおよびマスコミの方々と協働して年四回の季節キャンペーンを展開するなど、さまざまな取り組みを続けた。

これらの取り組みの成果か、二〇〇四年度(平成十六年度)には対前年度比(一〇・二%減と大幅に落ち込んだ観光入込客数も、二〇〇五年度(平成十七年度)は四二・二%増、二〇〇六年度(平成十八年度)は四一・六%増と回復する兆しを見せていた(図2)。

中越沖地震の発生

観光入込客数が回復傾向にあった二〇〇七年(平成十九年)七月十六日十時十三分、休日(海の日)の朝、新潟県を最大震度6強の揺れが襲った。震源は新潟県上中越沖(新潟市の南西約六十キロメートル)であり、震源の深さは約十七キロメートル、地震の規模はマグニチュード6.8、新潟県中越沖地震の発生である。長岡市、柏崎市および刈羽村で震度6強、上越市、小千谷市および出雲崎町で震度6弱を記録したほか、県内の広い地域で震度5強から震度4の強い揺れに見舞われた。また、原子力発電所の立地地域の近くを震源とした地震であり、所内変圧器の火災が発生した。

風評被害の発生

中越沖地震による観光業の被害の特徴としては、「地震による直接被害は限定的」でありながら「当県観光イメージの悪化」により「県内全域で観光客が激減」したことである。

中越地震に続く大規模地震の発生や原子力発電所内の火災、新潟の名前を冠した「新潟―神戸ひずみ集中帯」が取り上げられたことなどにより、本県の安全イメージが悪化し、全県的な風評被害が生じた。

新潟県の調べによると、二〇〇七年度(平成十九年度)の県内海水浴客数は二百万人で、前年度の三百九十二万人から四九%減の大幅な落ち込みとなった。このうち柏崎市の海水浴客数は十六万人で、前年度の百四万人から八四%減の激減であった。

このように夏の観光入込客数は極めて厳しいものであったが、さらに秋に至っても入込客数が前年度を大幅に下回り、伸びてこない状況が続いた。これはまさに中越沖地震の風評被害の影響であり、回復に時間がかかることが懸念された。

風評被害への対応

中越沖地震の発生直後の対応としては、中

越地震災時の経験から「正確な情報の発信」を速やかに行うことが重要と認識していたため、あらゆるチャンネルを活用した情報の発信を強化した。

原子力発電所周辺の農林水産物に関する放射能測定調査の実施やその結果公表、政府広報を活用したPRなど、行政機関による広報かつ積極的な情報公開が行われたことにより、観光業界としてもそれらを活用して広く一般に「正確な情報」を提供し、本県観光への安心感の回復に努めた。

当協会としても、八月初旬に首都圏PRイベントやメディアキャラバン、新聞広告等を集中展開する緊急キャンペーンを実施したほか、旅行エージェントに向けた誘客促進策など、緊急対策を講じた。

このような緊急キャンペーンを展開するなか、首都圏PRイベントなどに多くの方がお越しいただいたことに改めて御礼申し上げたい。

新潟県大観光交流年

二〇〇五年度（平成十七年度）から二〇〇七年度（平成十九年度）にかけて、県内観光業界は主に「復興」をキーワードに宣伝や観光資源開発、受け入れ体制整備に取り組んできたが、震災を契機に県内観光業界が一体となった取り

組みが行われてきたことから、「復興」から「飛躍」に向けた中・長期的対応が必要なのではないか、との機運が県内で徐々に高まってきた。そのようななか、二〇〇九年（平成二十一年）

に、新潟ステイネーションキャンペーン開催や、NHK大河ドラマ『天地人』（新潟などが舞台）放映、「トキめき新潟国体・トキめき新潟大会」の開催など、全国から新潟に注目が集まる取り組みが集中することとなったため、この年を「新潟県大観光交流年」と位置づけ、県内観光関係者が幅広く結集した「2009新潟県大観光交流年推進協議会」（事務局・新潟県観光協会）を二〇〇七年（平成十九年）十月に発足した。

当県観光業界が、「復興」から「飛躍」に向けた取り組みへの移行を目指して大きく舵を切った時期であった。

今後の課題

二〇〇七年度（平成十九年度）の当県観光入込客数は対前年比五・〇％減と再び落ち込む結果となったが、「2009新潟県大観光交流年推進協議会」およびそれを引き継ぐ「うまさぎっしり新潟」観光推進協議会の取り組みなどにより、二〇〇八年度（平成二十年）および二〇〇九年度（平成二十一年）には増

加傾向に再び転じたところである。

データ上では、これらの復旧・復興・飛躍の取り組みを経て、当県観光は二度の震災による風評被害および観光客の減少からはおおむね回復してきているといえる。

しかしながら、二〇〇九年度（平成二十一年）の増加はさまざまな要素が集中した面も大きく、当県観光がまだまだ多くの課題を抱えていることは事実である。

これらの課題克服に向けて取り組んでいたところ、このたびの東日本大震災に見舞われ、当県観光もまた大きな影響を受けたが、これまでの経験を生かし、正確な情報発信を行いながら、観光復興に全力を注いでいきたいと思っている。

終わりに

ここまで過去を振り返ってみて、復興に向けた取り組みのさまざまな局面のなかでいかに全国からの支援を受けてきたか、改めて感じさせられた。

東日本大震災によって甚大な被害を受けた東北各県の皆さまには、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げるとともに、被災地支援・被災者支援につなげることを心がけながら、観光の活性化に積極的に取り組んでいきたい。

（たかはし ただし）



連載Ⅰ
あの町この町
第44回

ザ・モースト・ビューティフル・ヴィレッジ——長野県大鹿村

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト)著者

岡谷で飯田線に乗り替えた。正確にいうと飯田線は二つ先の辰野からだそうで、みやき、いなしんまち、はば、さわ、いなまつしま……。さしあたりのお目当て「いなおおしま」は二十七番目。駅名のアタマに「いな」がひんばんにあらわれて、伊那地方に入ったことを告げている。

やがて西かたに雄大な山がのぞいてきた。経ヶ岳から駒ヶ岳につづく山並みで木曾山脈、またの名が中央アルプス。東かたは大きな谷にひろがり、その底を天竜川が流れている。寄りそうように国道153号が南北にのびており、旧伊那街道である。地図を開いて、あらためて位置をたしかめた。目ざす大鹿村は伊那の村であるが、伊那谷から山越えをしなくてはならない。つまり平行してもう一つの谷が南北に走り、大鹿村はその谷の一画にある。谷底を

一つの川が、鹿塩川、小渋川、上村川、遠山川と名を変えながら流れていく。これに寄りそっているのが国道152号、旧秋葉街道である。

伊那谷とくらべて谷は小さく、天竜川とくらべて川も細い。東には三千メートル級の赤石山脈、別名南アルプスが屏風のようにそびえ立っている。伊那谷とのあいだの西の山並みは標高こそ千メートルクラスだが、畳々とかさなり合って通行を阻んでいた。現在でこそ飯田線伊那大島駅、また近くの松川ICを起点に東西軸で大鹿村を目ざすが、古くはもっぱら南北軸の秋葉道が外に開いた窓の役目を果たしていたのではなからうか。

大鹿村のキャッチフレーズは二つあって、一つは「中央構造線の村」、もう一つは「大鹿歌舞伎の村」。中央構造線は地理・

地質にかかわり、こちらには苦手の分野だが、幸いにも村立中央構造線博物館があって、そこで教えてもらえる。歌舞伎のほうは「地芝居」とよばれる農村歌舞伎の流れだが、大鹿歌舞伎は並外れている。江戸半ば以来の三百年の伝統をもち、演目もケタ外れに多い。ひところは村に十三もの舞台があった。現在も四つが健在で、そのうちの二つが春と秋の上演にあてられている。

秋葉街道を南下すると「遠山郷」といわれる地域に入っていく。古くから神楽の伝統があつて、冬のあいだ、どこかの集落できつと、おどろおどろしい神楽面をつけた神々がはねまわる。さらに下ると奥三河であつて、こちらは「花祭」の行事で知られている。太鼓、笛、鈴の奏楽のもとに、市の舞、花の舞、釜割り。道化役がこっけいな伴の舞を演じて笑わせる。どうしてひと

きわ山深いところに独特の芸能が根づいたのだろうか？ どこも飯田線が開通するまでは「秘境」といわれたところだ。歌舞伎、神楽、花祭とジャンルはことなるが、いずれも山々でへだてられた別天地で花開いて、中央構造線に沿っている。

「ウーム——」

謎解きを思索している探偵のように腕組みして考えた。気がつくとも木曾駒が背後に遠去かり、いつのまにか谷のかなたに赤石連峰がせり上がっていた。

大きな鹿のいるような奥深い山ふところなので大鹿村——いかにもピッタリの村名だが、明治七年に大河原村と鹿塩村が合併するにあたり、二つの頭文字をくっつけてできた。真相はそのとおりだが、それでもなお、単なる結合を意味深い地名に変える自然の生理といったものが、それとなくはたらいてきたような気がする。少なくとも小渋川のほとりから見上げる大パノラマには、「大イナル鹿」のイメージが二つとないほど符号している。

大鹿村中央構造線博物館は小渋川の河原のそばにあつて、トンガリ屋根をもつモダンなコンクリート造りだ。前庭にゴタゴタ

と石が並べてあつて、地面に「中央構造線」と文字が配してある。理系がダメな人間には、石はゴタゴタとしか見えず、地面の文字も何のことだかわからない。学芸員はひと目で「理科に弱い人」を見てとつたらしく、「手短かに、わかりやすく」を強調して説明にかかった。

日本列島ができたときの大地の動きが関係していて、大陸プレートと海洋プレートがぶつかり合った。大陸側は硬い花崗岩、海洋側は板を重ねたような結晶片岩より成っていて、大鹿村はまさに二つの境界上にある。小渋川をはさんで西は花崗岩質、東は結晶片岩質。西は硬いので山々はそそり立ち、東は地すべりを起こしやすく斜面はなだらか。

「ホラ、ごらんください」

窓から大河原地区がよく見える。川の西は傾斜が急で、集落はない。東の斜面はあちこちが平べったい三角状をしていて、けっこう高いところにも家が点在している。いつか四国で見かけた風景とそっくりである。おどろくほどの高所にポツリポツリと

民家があつた。

劣等生がたまにはいいことを言うというふうな学芸員がうなずいた。中央構造線は

関東から九州にかけて日本列島を縦断するかたちでのびており、これに近いところは、よく似た景観をみせてくる。

シロウト考えでは硬い地盤のほうが崩れず、地すべりも起こさないので住むのに適していると思うのだが、逆であつて、地すべりを起こすと水脈が表面に出て水が得られ、地すべりのあとはゆるやかに固定するので住むにも田畑をひらくにも便利である。あとは太陽の恵みがあるかどうかだ。村をまわってたしかめたことだが、大鹿村の集落はほぼすべて南に面した古い地すべりの跡につくられている。

博物館の西のかみ手が巨大な爪でえぐりとつたように崩れている。花崗岩質の急斜面は永い歳月のなかでヒビ割れを起こし、豪雨を受けたりすると一気に崩れる。昭和三十六年六月、伊那地方をみまつた未曾有の大雨で西の斜面が大崩れを起こした。土砂が川をこえて東岸の家々を埋めつくし、四十人あまりの死者が出た。崩壊跡は公園になり、桜千本が植えられて慰霊の観音さまが見守っている。

苦手の理科をすましたので肩の荷が下りたぐあいだ。村役場は大河原地区と鹿塩地区のほぼ中間にあつて、フロアに阪本順治

監督、原田芳雄、大楠道代、岸部一徳、松たか子、三國連太郎出演の映画『大鹿村騒動記』のポスターが貼ってあった。

「涙も忘れて心が躍る。小さな村のハレ舞台」

キャッチフレーズに「娯楽の原点ここにあり」とついている。村でシカ料理店を営む初老の男（原田芳雄）が主人公で、歌舞伎の花形役者だが、女房に逃られた独り者。秋の公演を五日後に控えたある日、十八年前に駆け落ちした妻と幼なじみもどつてくる——。そんな幕明け。たまたま私は試写会で先に見たのだが、人の女房と駆け落ちした幼なじみはオサムといって、わが名と同名。かなりくたびれた初老ぶりも瓜二つである。

村役場のフロアにはまた、きれいなイラストに『the most beautiful villages in Japan』と添えたポスターがあった。NP〇法人「日本で最も美しい村」連合といって、霞ヶ関の音頭とりによる市町村合併にはのらず、自立の道を選んだ町村が加盟している（二〇一一年六月現在、計三十九町村）。自然と人との営みが長い年月をかけてつくり上げた景観と文化を守っていく、そんな「志」をもった誇り高い自治体だ。



「日本で最も美しい村」ポスター

リストをいただいたので、ためしに数えたら、三分の一あまりは訪れたことがある。それと知らず「日本で最も美しい村」を自分なりに探し当てていたわけだ。

映画に出てきた市場神社舞台は鹿塩地区の塩河にあつて、木造二階建て、間口六間、奥行四間、太夫座と回り舞台をもつ立派なもの。嘉永四年（一八五二）の建設、昭和四十七年（一九七二）に改修されたという。

二階の手すりや歌舞伎座の棧敷席と連想させる。左手の出っぱりが花道になるのだから。前が広くひらけていて古木が枝をさしかけ、天然の屋根をつくっている。市川中車や尾上多賀之丞といったプロの役者もここに立ったというが、舞台を下見にきたとき、そのととのいぶりに驚いたにちがいない。お隣が市場神社で、神社の付属のようにしておけば、お上にとつちめられても神



市場神社舞台

事用と言い逃れができる。

地名の鹿塩や塩河は山腹の塩泉にちなむのだろう。山中に塩水が湧く。明治の初めには製塩場がつくられ、やがて塩化泉の温

泉が誕生。現代の鹿塩温泉である。

大鹿村には南朝の皇子で当代きつての歌人でもあった宗良親王をめぐるとい伝えがあり、それによると興国四年（一二四三）、大河原城に入り、当地の豪族香坂一族に庇護された。爾来三十余年、ここを拠点にして活躍、親王の墓標塔とされる古い宝篋印塔ものこされている。

「いったい、どういうことだろう？」

にわか探偵は首をひねった。というのは赤石山脈をこえたところの甲州・早川町奈良田は大鹿村と対蹠的な位置にあるが、そこにも塩水が湧き、都を逃れてきた奈良田王伝説がある。

山深い地方では塩がダイヤのように貴重であって、それがやんごとなき貴人伝説と結びついたのであるか。どちらも「日本で最も美しい村」連合のお仲間なのがほほえましい。

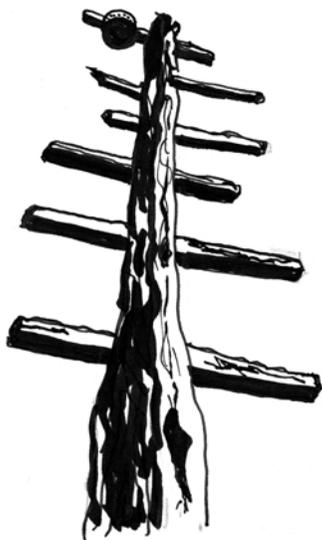
市場神社から少し坂道を上がると梨原集落で、そこに葦原神社舞台がある。同じく木造二階建て、間口六間、奥行四間、太夫座、回り舞台つき。ほかに春の上演に使われる下市場の大磧神社舞台。上蔵の野々宮神社舞台。規模、設備、いずれも同じ。下市場の舞台が最も古く、文政元年（一八一八）

に建てられている。かつてはこの四つのはかに九つもの舞台があった。地区を問わず、ほほすべての集落が自前の舞台をもっていたことになる。

「大鹿歌舞伎の歴代太夫・師匠」

郷土資料館「ろくべん館」に明治から昭和初年にかけて活躍した芸好きが紹介されていた。出身地が大鹿村中尾、中峰、塩河、沢戸、上蔵、塩原などちらばっているのは、各舞台の花形だったのである。芸名は竹本小由太夫、竹本春鈴太夫、市川新十郎太夫、同じ人が義太夫をうなるときは竹本信太夫だった。めいめい十八番をもっていて、御所桜堀川夜討三段目弁慶上使の段、絵本太功記本能寺の段、奥州安達原三段目……。明和四年（一七六七）の名主の日記に、この日は「家内不残狂言見物」とあって、そのころすでに歌舞伎が行われており、ルーツはさらに昔にさかのぼる。平成の世になつて大鹿歌舞伎はオーストリアやドイツでも公演したが、伝統芸というとき、江戸歌舞伎にいささかもひけをとらないのだ。

地芝居が盛んだったことについては、山々にさえざられていてお上の目こぼれがあったこと、出し物が勸善懲惡物で大目に見られたこと、秋葉街道を通して、芸能人



木の文化の証人・火の見櫓

の往き来があったことなど、いろいろな理由がいわれるが、その根っこに経済的な余裕があったせいではなからうか。大鹿村はもともと江戸幕府直轄の樽木成村^{ちよつかつ くれきなりむら}だった。「樽」は切り出したままの丸太や木材のことで、年貢を木材で納める。まわりの山々はひのき、さわらなどの良材を産した。壁や柱に使われ、現物貨幣としても流通した。天候・気象に大きく左右される米とちがひ、木材は計画伐採さえ守っていれば、きちんと一定量を収穫できる。年貢の樽木を納めれば雑木は自由であって、へぎ板、経木、絵馬板、曲輪^{まげわ}、下駄歯、担い棒、曲物用……。日本は長らく木の文化の国であり、木炭というエネルギー源のほかに、生活具のおおかたを木でまかなっていた。地方



名優たちの面影(ろくべん館)

役人は米づくりは厳しく見張っていても、山深いところの産物には目がとどかない。樽木成村ならではの産業があつてこそその大鹿歌舞伎にちがいない。ほぼ同じことが遠山郷にも奥三河にもいえただろう。旧来の山の文化がジャンルのちがう伝統芸能をはぐくんできた。

現大鹿村は塩の里特産品加工所、塩の里みそ加工所をもち、山塩、みそ、せんべい、羊かん、まんじゅう、漬物を一手に扱っている。大鹿の土地と気候と風土が育てた小豆、大豆、ささげ、黒豆は豆の世界の一級品である。特産大豆を使った大鹿地大豆とうふ、特産ブルーベリー、大鹿そば……。現代の産業にも「大鹿村」というブランドが有形無形に寄与している。

大鹿村役場総務課発行のパンフレット「柳土情の世界」は、切り絵で村の四季を描いていて、こよなく美しい。作者は本名柳下修といつて、川崎市生まれの人。五十四歳のとき奥さんといっしょに大鹿村に移ってきた。切り絵制作のかたわら村の観光案内人をおかして出て、多くのファンをつくった。切り絵は気が遠くなるほど手間と根気のいる仕事だが、細密技法による白と黒の造形は特有の厳しさと詩情をたた

え、魂の故里へ誘うようなノスタルジアを秘めている。NPO法人「日本で最も美しい村」連合の宣伝用につくられたものだが、少しも宣伝臭さがなく、おのずと「日本で最も美しい村」の最も自然な宣伝役をつとめている。

大磯神社からゆるやかな坂道を上がつていくと、福德寺といつて、平治二年（一一六〇）建立とつたわる重要文化財の寺がある。小さく簡素だが形がみごとに調和して風格があり、何倍にも大きく見える。寺のある上蔵集落は、地名からして由緒ありげだ。宗良親王が暮らしたのもこの辺りで、信濃宮は親王ゆかりのお宮という。

高台に上がると集落が見渡せる。かなりの規模をもつ、ゆるやかになだれる平面で、遠い昔の地すべりでできたのだろう。大鹿村を不便な僻村と思うのは現代の交通網による錯覚であつて、人がみな自分の足で歩いてきたころ、「不便」という観念はまるでちがっていた。危険な川沿いを離れて坂を上がってきた人は、ゆるやかになだれる平面を見つけて小躍りしたにちがいない。南にひらけていて水脈もある。家の配置が独特で、一軒ごとに必ずかなりの畑をもっており、軒を接したり、蝟集していない。

水脈を分散して生かし、ひとしく水を配ることから生じた散居形式ではあるまいか。そのため、どの家にもふんだんに太陽の恵みがある。風除けの杉林もないところをみると、地形が風を阻んでいるのだろう。しっかりと木組みの家々が、まさに切り絵の世界そのままだった。

名前は大鹿でも山に多いのはヤマネ、ノリス、ノウサギ、クロウタドリだそうだ。山里におなじみで、人の暮らしとかかわりの深い小動物である。小さくても自由に生きたがる生き物で、人間がなれなれしく近づくと、そっぽを向いて姿を隠す。

このとき静まり返った山道を茶色のかたまりがころがるように走り出しヤブに消えた。まっしぐらに走る息づかいが聞こえた気がした。そのあとは深い静けさ。

大鹿村がザ・モースト・ビューティフル・ヴィレッジなのは、自然がゆつくりと動いているからである。時がめぐり、冬が訪れ、歳月がうつり、生き物が死に、また生まれくる。自然のドラマがしっかりとあるからこそ、日ごろはつましい生活者が白塗りの役者になり、名セリフを口にして、おひねりの雨が降る。

（いけうち おさむ）



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り65

日本人の誇りとしてのホテル

旅行作家

山口 由美

***** 歴史を ビジュアルに表現する工夫を

オムレツを作らせたら、日本のホテルほど、見た目の美しさとおいしさにおいて平均点の高い国はない、と私はかねてから思っている。西洋料理において、すべての基本とされるのがオムレツである。

ランドリーの技術も評価が高い。『JM』という映画で、泥まみれになったキアヌ・リーブスがアドリブとして言う「このシャツを帝国ホテルのランドリーでクリーニングしたい」の台詞。これは、彼自身が帝国ホテルに滞在していた印象から、思わず口をついて出たものという。

日本のホテルのサービスは、目立たないけれど本質的などころで、抜きん出たレベルを持っていて。それなのに、世界の中で、その存在感は決して大きくない。

近年は、旅館の存在が、さらにホテルの存在感を薄くしている。旅館が Ryokan として世界に知られ、日本のホスピタリティーの象徴になるのはもちろんいいことだ。しかし、だから、日本のホテルはつまらない、という評価になつては悲しい。

東日本大震災後、ことさらに日本人の誇りであるとか、アイデンティティーが問い直されている。先の見えない状況だったインバウンドの観光も、香港などの近隣国によるキャンペーンが始まっている。こうした時期だからこそ、私たちは、日本の魅力をいま一度見直し、その潜在力を棚卸しする必要があるのではないか。その必要を感じるひとつが、日本のホテルである。

日本には、百年を超える歴史と伝統を誇るホテルがある。日本という国の黎明期、迎賓館として外国人を迎え、日本の誇りと「お

もてなし」を発信してきた。当時、植民地であったアジアの国々では、そうした歴史あるホテルは、もっぱら外国人によるものだったのに対し、日本のホテルは、多くが、志ある日本人によって創業され、運営された。富士屋ホテルや奈良ホテルの日本建築と西洋式スタイルの融合は、旅館とは違う、またアジアのコロナアルホテルとも違う、まさに日本独自のホテル文化なのだが、いま海外で、その知名度は決して高くない。

しかも、日本の歴史あるホテルでは、ホスピタリティーの伝統が、ほぼ途切れることなく伝承されてきた。第二次世界大戦前後の混乱はどの国にもあつたけれど、例えばベトナムや中国など、内戦や共産主義政権の台頭が続いた国では、実質、長い空白を挟んだホテルも多い。例えば、近年、大改装で生まれ変わったハノイのメトロポールや上海の和平飯店

帝国ホテル・ライト館の正面玄関
(写真提供：博物館明治村)



正面玄関の内部 (写真提供：博物館明治村)



店がそうだ。現在のオペレーションは、メトロポールがフランスのソフィテル、和平飯店が北米のフェアモントと、名だたるインターナショナルチェーンが行っているが、そのサービスは過去から綿々と継承されたものではない。

近年、ペニンシュラ、マンダリン・オリエンタル、シャングリー・ラなど、アジアを拠点とするホテルブランドの台頭が著しい。ペニンシュラとマンダリン・オリエンタルのブランドイメージを形作っているのは、それぞれフラッグシップとなっている香港のザ・ペニンシュラ香港とバンコクのオリエンタル（現・マンダリン・オリエンタル・バンコク）の存在だろう。だが、日本を代表するホテル、一八九〇年開業の帝国ホテルにしても、一八七八年の富士屋ホテルや一九〇九年の奈良ホテルにしても、例えばペニンシュラの一九二八年より創業は早いのである。それなのになぜ日本人は、不用意に、日本にはホテルの伝統がない、などと言うのだろうか。

デザインホテルズという、デザイン性の高いホテルを集めたホテルのコンソーシアムがあるが、その担当者が面白いことを言っていた。アジアの、特に日本と中国のメンバーホテルの数が少ないので増やしたいが、それぞれに問題があつて増やせないという。中国は、

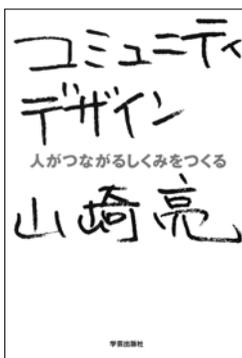
デザイン的に目を引くホテルはたくさんあるが、ホスピタリティーやサービスが追いつかない。一方、日本は、ホスピタリティーやサービスには何の問題もないのだが、デザイン的に面白いホテルが少ないというのだ。

日本のホテルの存在感が希薄な理由は、海外に向けた情報発信やマーケティングに問題があるだけではないのかもしれない。つまり、ホテルの存在をアピールする個人的なビジュアルの欠如である。それは、デザインホテルばかりでなく、歴史あるホテルにも言える。冒頭のエピソードが物語るように、帝国ホテルのサービスには世界に誇る伝統がある。

しかし、現在の建物には、残念ながら、その背景となる歴史をビジュアルで感じさせる要素が少ない。建築家フランク・ロイド・ライトによる旧ライト館は日本のホテルが誇るアイコンだったのに、その面影は、バーや宴会場の一部、スイートルームなど限られた空間にしか見いだせない。それらがホテル全体のイメージに投影されたなら、その存在感は外資系を寄せつけないだろうにと思う。日本のホテルの顔として、博物館明治村から旧ライト館の玄関が帝国ホテルに戻ってくればと思うのは、酔狂な夢なのだろうか。

(やまぐち ゆみ)

新着図書紹介



四六判 256ページ
定価 1,800円
学芸出版社

かつて、住宅地を計画することを意味した「コミュニティデザイン」という言葉は、人がつながるしくみをつくることに変化してきているという。著者は、「この五十年間にこの国の無縁社会化はどんどん進んで」、「もう、住宅の配置計画で解ける課題ではない」と断言する。

昭和三十年代に濃密な「近所」関係の中で育ち、映画『ALWAYS 三丁目の夕日』に描かれた世界をリアルタイムで経験している世代の中には、「人がつながるしくみをつくる」という考え方自体に違和感を覚える人も少なくないかもしれない。しかし、大学でランドスケープデザインを学んだ著者は、「無縁社会化の進展」こそ、自らの興味が「人のつながりのデザインへと移っていった」要因だったと述懐する。

著者は、学生時代に体験した阪神・淡路大震災でのフィールドワークを通じ、「瓦礫と化した神戸のまちに人のつながりが残っていて、そこから

生活再建の目が育っているような気がした」と記している。

本書「コミュニティデザイン／人がつながるしくみをつくる」(山崎亮著、学芸出版社)の

執筆が大詰めを迎えた段階で東日本大震災が発生し、著者は、本など書いている場合かと自問したという。「東北の復興にコミュニティデザインが必要なのは言うに及ばず、無縁社会化する全国地域にも人のつながりが求められている」と指摘する著者は、非常時のためだけでなく、日常の生活を楽しく充実したものにするためにも、コミュニティデザインが重要であると繰り返し訴える。非常時に大切な「人のつながり」は、平常時から手入れしておくべきものなのだ。

「人がつながるしくみをつくる」なんて「一体どういう時代なんだ」と嘆くだけの世代にも、勇気と希望を与えてくれる一冊だ。



政府によって「観光立国」の考え方が打ち出されてから、もう十年近く経つ。

かつて大手旅行会社に籍を置いたこともある著者は、「気がついてみると観光業界は、アウトバウンド一方向のビジネス競争に、時代の長きを費やしてきた」と喝破しつつ、「私たちは観光

インバウンドにおけるこれからは、先進の欧米や近隣アジアに学ぶべきことがこのほか多い」と指摘する。

本書「観光ビジネスの新潮流／急成長する市場を狙え」(千葉千枝子著、学芸出版社)は、オーストラリア政策の推進という航空新時代における空港の在り方に始まり、産業観光や海外ロングステイといった長年にわたる課題だけでなく、スポーツツーリズムやメディカルツーリズムなど、二世紀に入ってから脚光を浴びるようになったテーマも取り上げ、「既存の観光資源、観光対象の新価値創造」への提言を試みている。

各国における事例をマクロに捉えて紹介する本書は、著者が自負する通り、双方向が求められるながら「内閣タテ割りの観光情報発信が常態だった観光交流に一石を投じると同時に、改めて、観光立国推進に向け観光業界の奮起も促しているよっだ。

(挑全)



四六判 268ページ
定価 2,300円
学芸出版社

●旅行者動向2010 最新刊

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果をビジュアルに解説。
二〇一〇年十月発行。

●観光実践講座講義録 最新刊

街を活かす 街を楽しむ

毎年十一月に実施している二日間の講座講義録。平成二十二年年度の講師は、(有)都サイクリングツアープロジェクト代表取締役/ NPO法人自転車活用推進研究会理事・多賀一雄氏、千葉県香取市市民環境部市民活動推進課課長・椎名喜子氏、三重県政策部理事/「美し国おこし三重」実行委員会事務局長 藤本和弘氏、岐阜県高山市商工観光部参事・片岡吉則氏、マルティスグループ代表取締役・那須俊宗氏、静岡県富士宮市総合調整室(兼)フードバレー推進室室長・渡辺孝秀氏。二〇一〇年三月発行。

●「バーチャルとの融合」が創る新しい観光

当財団主催「第20回旅行動向シンポジウム」採録集。
昨年十二月のシンポジウムは「ソーシャルネットワークが拓く旅行の新たな可能性」〜「位置ゲー」が仕掛ける。お出かけ「モチベーション」と題し、新しいIT発想やITによってつながった新たなコミュニティの中からは生まれた観光の芽吹きに迫りました。事例として取り上げたのは、二、三年でユーザー数を百八十万人以上へと急激に増やしている大人気の携帯「アンケートインメント」「コニーな生活☆PLUS」(略称「コロプラ」)。今回わかったのは、すでに「バーチャルとリアルの間を当たり前のように行き来している若者が「バーチャルと融合したリアルな移動(旅行)」という新しい楽しみ方を始めたのだということ。またコロプラはじめ携帯ゲームソフトなど若者に人気のコンテンツ制作現場や、若者の意識と行動に詳しく有識者が口をそろえて「若者も本当は出かけたい!」という気持ちは人間の根源的な欲求であることを認識しました。移動は楽しいのです。二〇一〇年六月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。

担当:財団法人日本交通公社 観光文化事業部
電話 03-52208-4704 <http://www.jtb.or.jp>



次号予告

●東日本震災で被災した人々は、各地域で育んできたコミュニティや伝統的な文化を維持していくことを願っています。次号特集は、「東北の持つ潜在的な「文化力」を探る」をテーマに、東北文化に精通された方々からの提言を紹介。「文化力」に潜むツーリズムの可能性について探ります。

研究調査たより

●全国各地で観光を切り口とした地域づくり、いわゆる観光地域づくりが広く取り組まれるようになってきている。こうした取り組みにおいて、課題の一つとして取り上げられることの多いものに「人材の育成」がある。

●調査の一環として、数年にわたり国や地方自治体などが実施する人材育成の取り組みの支援を行ってきた。その中で見てきたのは、教えることに加えて、経験させ、考えさせることの重要性である。人材育成は、知らないことを習得させることを目的とするが、人は、知っている知識、技術の範囲で物事を判断する傾向にある。学校教育と異なり、履修を強制させることのできない実践者育成では、受講者自身が、その能力向上を本気で重要だと理解することが必要なのである。そのためには、まず経験をさせ、「知らないことに気づかせる」ことが重要となる。

●次に、観光地域づくりは「こうすれば成功する」という正解の存在しない取り組みである。他地域のまねをするのではなく、自身で、自身の地域にとって最良と思われる答えを導き出していくことが求められる。そのためには、自身で考えることが重要なのである。

●経験させ、気づかせ、考えさせる。こうしたサイクルを確立していくことにより、観光地域づくりをリードする人材育成に今後とも寄与していきたいと考えている。(山田)

編集後記

◆四月中旬、日本建築学会主催「まちづくり展」で「復興への手がかりと希望の芽を探る」に関するワークショップに出席の機会を得た。総括討論で明治大学大学院の中林一樹特任教授が、「三陸海岸の小さな集落の復興再生を考える時、まず漁業から始め、次に足がかりとなる産業は観光ではないか。観光の専門家が地域コミュニティと連携、共同で観光、ツーリズムでまちおこしを行い、近隣地域同士が協力し合って観光分野でゾーンの活性化を図ることが有効ではないか」と発言され、そのとおりだと納得した。多くの方が観光、ツーリズムの可能性を認めて期待していることがわかったことで、特集企画への確信を強めた。

◆巻頭言では、地方行政の長として東北で活躍され、総務相を経験された増田寛也前岩手県知事に復興ビジョンを描いていただいた。

◆地震と甚大な津波被害から五年後に復興宣言した北海道奥尻町の新村卓実町長から、また阪神淡路復興で尽力された鳴海邦碩大阪大学名誉教授から、連続して二回の大地震に見舞われて大きな被害を受けた新潟の観光復興経験をもちに高橋正新潟県観光協会会長から、景観を専門とする立場で西村幸夫東京大学教授から、観光、ツーリズムに軸を置いた原稿をお寄せいただいた。観光、ツーリズムが一定の役割を担えて今後の復興への要素として多大な可能性があることを再認識できた。ご寄稿者に心から感謝の意を表させていただきます。

◆東日本大震災で被災された皆さまの心の安穩と被災地の一日も早い復興を祈りたい。(片桐)



観光文化 第208号

第35巻4号通巻第208号

発行日：2011年7月20日



発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第一鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第一鉄鋼ビル 観光文化事業部内
〒100-0005 ☎03-5208-4729
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：片桐美徳
発行人：志賀典人



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554